

## 書評・紹介

G. M. Bongard-Levin :

### Studies in Ancient India and

### Central Asia

佐々木教悟

この書物はソ連邦科学アカデミー会員で東方学研究所のボンガード・レーヴィン博士が一九五七年から七一年にかけてのあいだに発表した学術論文一七篇を一冊にまとめて、インドのデレヴィプラサード・チャットーパディヤ氏がソヴィエトインド学シリーズ No. 1 としてカルカッタにおいて刊行した研究論集である。ところで、この論集におさめられている論文は、いずれも古代のインドと中央アジアとの歴史と文化に関するもので、およそつぎの三部門に分けられている。

(一) 先史時代に関する諸問題。これは考古学と人種の歴史に関するものである。

(二) 古代インドの歴史と文化に関する諸問題。ここでは主としてマウリヤ王朝時代のインドの社会と政治に焦点をおいて宗教や文化の問題がとりあつかわれている。

(三) 中央アジアの歴史と文化に関する諸問題。ここでは主としてインドと中央アジアとのあいだの文化の交流に関心が

よせられているが、その文化は佛教文化である。

ここでいまは、上記の三つの区分にしたがって順次に紹介するとともに、筆者がとくに気付いた点をあげてみることにしたい。

#### 一

インドの原住諸民族のなか、その人種型の上からモンゴロル的要素のみられるムンダー族 (Mundās) は、インドの古典にしばしばでてくる先住民族ダーサ (dāsa) の一つであったとかんがえられているが、アーリヤ人が先住民族の文化を吸収してヒンドゥ文化を形成していった過程で、直接的にないしは間接的に影響をあたえたのがムンダー人であるとされている。ところでこのムンダー族は、かれらの有した水稲栽培の仕方、巨石文化、洪水神話、およびその他の文化の上から広く東南アジア諸族との関係が云云されてきたが、とくにヒマラヤ西部の原住民族のあいだにもムンダー語の痕跡があるとされる点が注目される。著者はこのムンダー族について、クル・クシェートラの都として知られているハスティナープラ (Hastināpura 漢訳佛典の象城、Mahāhārata の舞台となっているところ) の第二層の発掘調査にもとづいて詳細な考証をなし、かれらの祖先の有した物質文化を探ろうとこころみたのが「ムンダー族の起源」である。

ハスティナープラの層位的研究に関しては、すでに京都大学の西川幸治助教授によっても紹介されているが、『沈黙の世界史』8 新潮社、二九一頁)、著者は南インドの石斧文化、ナル

マダー川流域の幾何学的細石器文化などとの関連のもとに、いわゆるハラッパー文化 (Harappan culture) の形成者の謎を解くための第一段階として、先入観的にアーリヤ人の文化が先住者の文化よりもすぐれていたとする従来の見解の誤まりを是正しようとしている。

つぎの「モヘンジョ・ダロおよびハラッパーの印章にしろされた穀倉のシンボル」は、発掘された印章の研究調査にもとづいて、ハラッパー文化にその姿をみせる農園の構造を解明したものであり、そのつぎの「ハラッパー文化とアーリヤ人問題」は、近年ランプール (Rangpur)・ロータル (Lothal)、プラーバース・パタン (Prabhas Patan) およびその他の遺跡の新たな発掘によって、にわかにクローズ・アップされてきたハラッパー文化の性質について論じたものである。著者はとくにカリバンガン (Kalibangan) の発掘調査によって、灰色彩文土器文化の遺跡は牛や馬の飼育を知っていた農耕共同体の存在したことを示しており、しかもその彩文土器文化は侵入者なるアーリヤ人のもたらしたものでないことを主張する。そしてこれまでのマーンシャルやウィーラー説にもとづく外敵の侵入、すなわちアーリヤ族の優勢な力の圧迫によってハラッパー文化の栄えた都市の壊滅があったとする見解は速かに再検討されなくてはならないとのべるが、著者のこのような見解は、すでにインド人の考古学者たち (プーナのデカン大学のサンカリア、インド考古局のラルといった人たち) の提言するところでもある。いずれにしても、前一五〇〇年ころにインダス文明は滅亡してモ

ヘンジョ・ダロやハラッパーは廃墟と化した。ハラッパー文化以降にシンドにおこなわれたジュカール (Jhukar) 文化、ジャンガール (Jhangar) 文化の背景などに関する研究も急ピッチに進んでおり、文化の拠点がインダス川流域からガンジス川流域に移った理由やその時期などについても、根本的に再吟味されなくてはならないとがきているといつてよからう。

「インド人、スキタイ人と極地」は、インドの神話を手がかりとして、アーリヤ人とウルル山脈の西側に沿う地方に住むといわれるフィン・ウグリア族 (the Fino-Ugric) との関係を論じたものであるが、創造力に富んだアーリヤ人がうみだしたメーイルあるいはスメールの山、乳海、さらに舍羅夷 (Saraha) の語でよばれる空想的怪奇な八脚獣などについての解釈は、きわめて示唆に富んだものである。

## 二

マウリヤ王朝時代の古代インドの社会に関しては、いまなお未審の問題が多く残されている。「マウリヤ帝国に関する若干の基本的問題」は、アショーカ王の統治以前と統治以後とのあいだに佛教のサンガと社会の占める位置が転換していることに注目し、王の宗教政策の特色を論じたものである。「アグラメス——ウグラセーナ——ナンダとチャンドラグプタの即位」は、インド古代史のプランクの一つになっているナンダ王朝の諸王の系譜について考察したもので、ライチャードリーの研究 (H. Raychaudhuri: Age of the Nandas and Mauryas, Banaras,

1952) に助けられているとはいへ、チャイナの文献 Parisiṣṭa-parvan, Avasyaka-sūtra をはじめ、スリランカの文献 Mahāvamsa, Mahāvamsa-tīkā, Mahābodhivamsa など、あらゆる資料を用いて、アレクサンダー以後チャンドラグプタ即位にいたるまでのあいだの政治状況を克明にあとづけている。

「メガステネオスの『インディカ』とアシヨーカアの碑文」

は、両者の記述の一致する点を対照的に調べたものであるが、著者がここで関心をよせているものは、地方の行政機構である。「古代インドのアヴァダーナの歴史性——アシヨーカの罷免についで物語と皇后法勅——」は、あとの「クナラ物語」とともに Asokavadāna の研究である。著者はとくに Asokavadānamāla のサンクリット写本の研究に力をいれている。

Kuṅḍalāvadāna は両眼を失なったクナラ太子の悲運の物語をその内容とし、Asokāvadānamāla の第五に組み入れられているが、それは韻文のみのものである。しかるに Divyāvadāna につたえるものは散文よりなっている（厳密にいえば散文と韻文とをまじえた文体）。著者は前者の韻文と後者の散文とが正確に一致していることにひょうな興味をおぼえる。そしてクンメンユラの Avadanakapāṭa などをおぼえて、編成上の先後の問題を論ずるが、漢訳佛典のそれには全くふれるところがない。ちなみに、この梵語原典に見られるクナラ物語に関しては、一部分であるが、岩本裕教授によって対照がこころみられているが（『佛教説話』筑摩書房九二頁～九六頁）、依用の māla 中の Kuṅḍalāvadāna は、ボンガード・レ

ーヴィン博士が依用するモスコ一本とは異なり、東京大学とケンブリッジ大学の所蔵する写本によって自ら校定したものとわれている。

「ベンガル出土のマウリヤに関する碑文の文書」は、マハースターン付近の発掘によって得られた七行ばかりのプラーフミ文学のものであるが、従来の読み方に検討を加えて、マウリヤ時代における行政組織（たとえば Puṅḍranagara の Mahāpatras について語るなど）を知るための資料の一つとしての価値を論じたものである。また、「古代インドのガナとサンガとにおけるヴァルナシステムに関する若干の特質について」は、マウリヤ王朝時代における古代インドの階級制度と国家組織と初期佛教教団のありかたとを考察して、それぞれのあいだの関連性に注目するが、アシヨーカ王の宗教的な施政の顕著な特色についても言及している。すなわち、王が求めんとした支持勢力はたんに佛教のサンガや出家者からのものではなくして、佛教に帰依したところの在俗者の拡大された層からのものであったとしている。

### 三

「クシャン時代における中央アジア——ソヴェエトの学者による考古学的研究——」は、主としてソ連領の西トルキスタンと、北部アフガニスタンとの地区におけるソヴェエトの諸学者による考古学的調査の報告ともいうべきもので、クシャン時代の佛教なかならず佛教美術の流れを知るためには貴重なものと

いってよからう。

ソ連が中央アジアと呼ぶのは、通常、ウズベキスタン、タジキスタンの二共和国を中心として、それに加えてキルギス、トルクメニアをも含んでいる地域を指し、東はバミールの両斜面から、西はアラル海の南部附近に及ぶ広大な地域である。この地域の考古学的調査は、すでに一九二〇年代からはじめられており、主なものをあげるならば、一九二六～二八年のテルメズ附近の調査、一九三二～三七年のアイルトムの調査、一九三七年のブハラ調査およびホルムズ調査、一九四六年のブハラのワラフシャならびにサマルカンドのアフラシヤブ調査、一九五〇～五一年のタジキスタン南部の調査、そしてサマルカンドのピヤンジケントの調査、一九五九～六三年のハルチャヤン調査、一九六一年のカラ・テペの調査、一九六七年のダルヴェルジン・テペ等の調査がある。この中とくに大クシャン時代（一世紀—三世紀）に属するものとして注目されるのは、ウズベキスタン南部のアイルトム（聚落址、佛教寺院）、カラ・テペ（佛教寺院）、ダルヴェルジン・テペ（聚落址、佛教寺院）であり、小クシャン時代（四、五世紀）に属するものとしては、ホラズム地方のトブラク・カラ（宮殿址）、コイ・クリルガン・カラ（都市址）であるが、アイルトム付近の古テルメズ出土の浮彫やチャカラク・テペの彫刻などもこの期に属せしめられている。またポスト・クシャン時代（七、八世紀）に属するものとしては、タジキスタン南部のアジナ・テペ（佛教寺院）、タシケント付近のクヴァ（佛教寺院）、サマルカンド付近のアフラシ

ヤブ（都市址）、ピヤンジケント（都市址）、ワラフシャ（都市址）などである。

上記の各遺址からおびただしい考古学的遺品が発見されており、佛教のみにかぎっても、佛像・菩薩像・舍利容器・壁画・塔・塔院・祠堂・僧院など、クシャン時代の佛教を知るための材料が山積しているといつてよい。われわれはアフガニスタンにおけるフランス隊、ガズニにおけるイタリア隊、ジュララバードやクンドゥスにおける日本京大隊の発掘調査とともに、ソヴェエトの各隊による前記の調査をあわせて総合的な研究調査の成果を期待してやまない。

「インドと中央アジア——古代における歴史的文化的接触——」は、バクトリア、ソグド、バルチャ、ホラズムの各地区と西北インドの各地域とが同一帝国の各パートをなしたために文化の交流がきわめてスムーズにおこなわれたとあり、インドと中央アジアとが相互に接触し影響し合った面を具体的な調査資料にもとづいてのべたものである。ここでもっとも注目すべき問題は、佛教の歴史の展開の問題であり、それを明かにするための鍵として、発見された佛教寺院の部派所属や大乘佛教流通の仕方などがあるが、現在の段階としては、まだそのことを論ずるまでにはいたっていない。

なお、これまで中央アジアの佛教美術といえば、スタイン、ペリオ、大谷探検隊などによって明らかにされた東トルキスタン地方の遺跡ならびに遺跡から出土した遺物にもとづくものであったが、これまでブランクのままに放置されてきた西トルキ

スタンと北部アフガニスタンの遺跡および遺品が加わることに  
なり、従来の見解は是正されなくてはならないことになってい  
ることを一言しておこう。そしてクシヤンの美術として、すで  
によく知られているガンダーラ美術、マトゥラー美術の他にト  
ハリスタン美術のあることを付言しておきたい。

「中央アジア出土の新しい佛教テキスト」は、レニングラー  
ドのソ連邦写本蒐集部所蔵の写本の中に、法華経最古の現存写  
本(マツカトニ本)の他に一〇〇点もの異なつた法華経の写  
本のあること、ホルスタインの音写で知られている迦葉品のサ  
ンスクリット写本、摩登伽経の断簡、法集名数経や翻訳名義大  
集と同形式の法舎利経の写本の完本、優波先那経、波羅提木叉  
経、月灯三昧経などの断簡、金剛手善面陀羅尼経、大般涅槃經  
の六點のサンスクリット断簡、律や陀羅尼類の断簡、その他コ  
ータン語の經典や文書類などのあることを紹介している。「法  
華経のまだ知られていない写本の断簡」は、N・F・ペテロフ  
スキーのコレクション Code S1<sub>D</sub><sup>62A</sup> にして、法華経第六授記  
品の初め世尊の偈に相当し、ケルン・南条本ならびにペテロフ

スキー・コレクション中のカシュガル本と対照している。「善  
面(妙色)陀羅尼のサンスクリット断簡」は、同じくペテロフ  
スキー・コレクション Code S1<sub>D</sub><sup>65a</sup> にして、これは大正蔵  
No. 1139 護命法門神咒経に相当し、チベット訳も存する(Otani  
No. 309, Tohoku No. 614)。著者はシャカテキストとともにこ  
れらを対照している。「法舎利経のシャカ訳の断簡」は、同じ  
くペテロフスキー・コレクション中のもので、シャカ語のもの、  
サンスクリットのもの、イディクシャフリ出土のものなどと対  
照している。

最後に付録として、ロシアにおける佛教研究の歴史について  
その概要を記したものがつけられているが、これによってわ  
れわれは、ミナエフ (I. Minayev 1840-1890) 以来、スチェル  
パッキイ (F. Sheherbatsky) オルデンブルグ (S. Oldenburg)  
を経て現在にいたる、かの地の佛教学者のあげた業績をきわめ  
て容易に知ることができる。

(Firma K. L. Mukhopadhyaya. 6/1A, Dhiren Dhar Sarani,  
Calcutta-12. B6. pp. 287)